

児童文学『トムは真夜中の庭で』にならう高齢者との出会い方

—力動的個人心理療法の視点から—

○林 智 一

(大分大学医学部)

目的と方法

『トムは真夜中の庭で』(Pearce, 1958)は、高杉一郎訳(1975)により岩波少年文庫から出版された児童文学の古典である。夏休みを叔父夫婦のアパートで過ごすことになったトムは、真夜中に古時計が13打つ音を聞き、昼間はなかった庭園でヴィクトリア時代の少女ハティと出会う。出会うたびに時間が違い、季節は夏だったり冬だったりして、ハティは大きくなったり小さくなったりしている。ハティが実は家主のパーソロミューおばあさんであり、おばあさんの夢の中で2人は出会っていたことが判明して物語は終わる。

この作品に対しては、すでに河合(1989; 1991)の論考が見られるが、高齢者に対する心理療法における問題について、示唆するところも大きい。今回は、高齢者との心理療法における転移・逆転移とライフレビュー(Butler, 1963)の意義を中心に検討することを目的とした。

結果と考察

1. 高齢者と転移・逆転移

最初に出会ったハティは、トムよりも幼い少女であったが、出会うたびにハティは少女であったり大人の女性であったりした。転移という観点から考えると、1人の高齢者の中には、幼児もいれば大人もいると言えよう。おばあさんの夢には、結婚前のハティまでしか表れていないが、一般的な心理療法においては、さらに成人期、中年期、そして高齢期のクライアントと出会うことになる。

なお、Knight(1996a)は、高齢者からの主要な転移として、面接者がクライアントの子や孫のようにとらえられることもあれば、逆に親のようにみなされることもあると述べている。一方、面接者側の逆転移としては、高齢のクライアントを自分の親や祖父母のようにみなすことがあるという。

トムは、ハティの成長に気づかず、いつまでも自分よりも幼い少女としてのハティのイメージを抱き続けていた点も興味深い。逆転移とも受け取れるが、高齢者の心理療法では暦年齢よりも神経症の年齢が重要と言われ(Abraham, 1919/1977)、ここでは神経症の年齢への注目とも考えられよう。

2. ライフレビューという視点の有用性

Freud(1905)は、①50歳前後の人々には精神分析に必要な精神過程の柔軟性が欠如していること、②高齢者の長い生育史を考えると、取り扱うべき材料が多すぎて終結の見通しがたたないことの2点から、高齢者への精神分析の適用に否定的であった。

まず精神過程の柔軟性に関しては、Berezin(1982)が、人格の硬直化は加齢の作用ではなく、その人が本来持っている人格構造の問題であるとして、Freudの悲観論を否定している。次に長い生育史については、かなりの編集作業と、すべての話題を扱おうとは思わないことが求められると言われている(Knight, 1996b)。林(2003)は、この生育史の編集作業という点で、ライフレビュー(Butler, 1963)が1つの視座を提供すると指摘する。

ライフレビューとは、クライアントの生育史の聴取を中心とする方法で、適応的に進展した場合、不安が軽減され、人に死への準備をさせるという。

トムが庭園で様々な季節、年代のハティと断続的に出会ったことは、ハティにとってのある種のライフレビューであったとも考えられる。特に、非構造的ライフレビューに近い。非構造的ライフレビューでは、クライアントの思い出せる時点、話したいエピソードから回顧してもらうので、必ずしも幼児期から少年期、青年期という順序だった回顧がなされるとは限らないからである。

3. なぜ夢の中の庭園で2人は出会ったのか

幼くして両親を亡くしたハティは、孤独を感じることも多かったと思われる。そして年老いた今も孤独な1人暮らしである。トム自身もアパートで遊び相手もおらず、孤独だった。まるで孤独な2つの魂が引かれ合って、夢の中の庭園で出会ったかのようなのである。面接者は、高齢者の現実的孤独を埋める“rent-a-friend”になるべきではないが(Götestam, 1980)、高齢者の孤独に寄り添う姿勢として見れば、心理臨床家が見習うべき点もある。[日本心理臨床学会平成28年度研究助成『高齢者の心理療法におけるライフレビュー・プロセスの検討』(研究代表: 林 智一)による]